

ISTC/SAC 議長が行く

－ジョージア編－

日本原子力研究開発機構

深堀 智生

fukahori.tokio@jaea.go.jp

1. はじめに

3 回にわたって、国際科学技術センター (ISTC) の科学諮問委員会 (SAC) 議長として訪れた中央アジア、コーカサス地方の諸国の都市について紹介させていただいた[1-3]が、今回はコーカサス地方のワインで有名なジョージアの首都トビリシについて紹介したい。ジョージア (旧グルジア) 共和国は ISTC の加盟国 (被支援国) である。2016 年 12 月、ここで ISTC/運営理事会 (GB) を開催することになったため、訪問が実現した。ISTC に関しては、カザフスタン編ですでに記載したので、今回は「柔らかいお話」限定でお届けする。

2. ジョージアについて

ジョージアは、カスピ海と黒海の間位置し、コーカサス山脈の南麓、黒海の東岸にあたる (図 1)。世界で 2 番目にキリスト教を国教としたとされ、各地に歴史ある聖堂や修道院が現存している。古くからアジアとヨーロッパの十字路として栄えてきており、数多くの民族が行き交う交通の要衝である。このため、幾度も他の民族支配にさらされる地にありながら、キリスト教信仰をはじめとする伝統文化を守り通してきた。一方で、温暖な気候を利用したワイン (グルジアワイン) 生産の盛んな国としても知られている。ワイン好きの方々は既にご存じかもしれないが、現在のところ、もっとも古いワイン土器はジョージアのシュラベリ・ゴラ遺跡 (BC 6000 年頃) で発見されたものとされている。公用語はジョージア語であり、宗教的にはジョージア正教 (キリスト教) が最も信仰されている。



図1 ジョージアと周辺の地図 (©Google Map)

3. 首都トビリシ

後の説明のため、Wikipedia (ジョージア(国)) を参考にジョージアの歴史を簡単に記載しておく。ジョージアの前身であるイベリア王国では、330 年代にキリスト教に深く帰依したミリアン3 世によってキリスト教が国教として採用された。世界でも 301 年のアルメニア王国に続いて 2 番目に古いキリスト教国教化の例であり、キリスト教がこの地域の公式宗教となったことは、その後の文化の形成に大きな影響を及ぼした。グルジアの教会は当初、シリアのアンティオキア総主教の管轄下に置かれたが 466 年には独立教会となり、カトリコス (総主教) の座はムツヘタに置かれた。イベリアは、一時ペルシア人の支配を受けたが、5 世紀末には剛勇で知られるヴァフタング 1 世 (ヴァフタング・ゴルガサリ) によって主権が回復され、トビリシの都市的発展が始まった。6 世紀初頭、ヴァフタング 1 世の子のダチ王が父の遺言に基づきムツヘタからトビリシへ遷都した。トビリシ (ジョージア語で「暖かい」の意) の名は、ヴァフタング 1 世が狩りの途中でキジを射抜いた時、そのキジが温泉に落ち、傷が癒えたことに由来する。

上述の通り、なんと 5 世紀からジョージアの首都であるトビリシは、かつてマルコポーロが「絵のように美しい」と称えた当時の雰囲気を残した街である。コーカサス地方の中でも規模が大きなこの町には、ジョージア正教やロシア正教の教会、モスク、シナゴグがあり、確かにこの街が多民族国家であることを感じさせてくれる。トビリシの市街図を図 2 に示す。



図2 トビリシ市街図（観光パンフレットより）

図2の左側のところにある Holiday Inn が今回の会議場兼宿泊所であるが、ご覧の通り、中心の市街地自体はマトクヴァリ川を挟んで比較的コンパクトである（図3）。ホテルの前に「5月26日広場」というのがあるが、これは1918年5月26日にグルジア民主共和国として独立を宣言した独立記念日に由来するものである。5世紀から首都であり続けるトビリシであるが、主権国家は紆余曲折を経て、1921年には赤軍の侵攻を受けその後ソビエト連邦の構成国となり、ソ連の崩壊に伴い1991年4月に共和国として独立を回復した。2015年4月以前の国家名称については「グルジア」、それ以後については「ジョージア」である。



図3 2016年当時のトビリシ市街（筆者撮影）



図4 TVタワーと城塞跡（筆者撮影）

高いところが大好きな筆者は、タワーがあれば上ることになっている。トビリシにもTVタワー（図4左）があると聞いて訪れたが、日本ではありえないような山の上に斜めに立っているように見えて、残念ながら上ることはできなかったが、下から見上げて、ひとり気持ち悪がっていた。また近くに、城塞跡（図4右）があり古の趣をたたえていた。

トビリシ旧市街の中でも、ひと際存在感を放っている教会が2004年に創建されたツミнда・サメバ大聖堂（図5左）で、シオニ大聖堂に代わって新たにジョージア正教の総本山となった。シオニ大聖堂は6世紀に創建され、2003年までジョージア正教の総本山でもあった。ここには4世紀にジョージアにキリスト教をもたらしたとされる聖ニノの十字架が祀られている。この敷地内に、トビリシを首都としたヴァフタンク1世像（図5右）があり、街を見守っている。

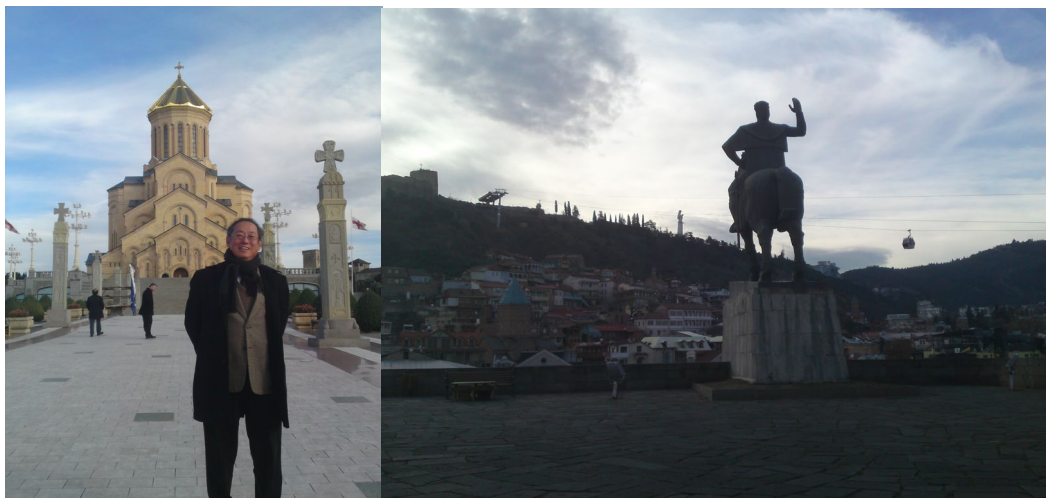


図5 サメバ大聖堂とヴァフタンク1世像（筆者撮影）

トビリシの名前の由来となった温泉施設(図6)にも入浴はしなかったが立ち寄った。いまだに現役で利用されているらしい。意外と日本の温泉と同じような感覚に陥ったことを覚えている。

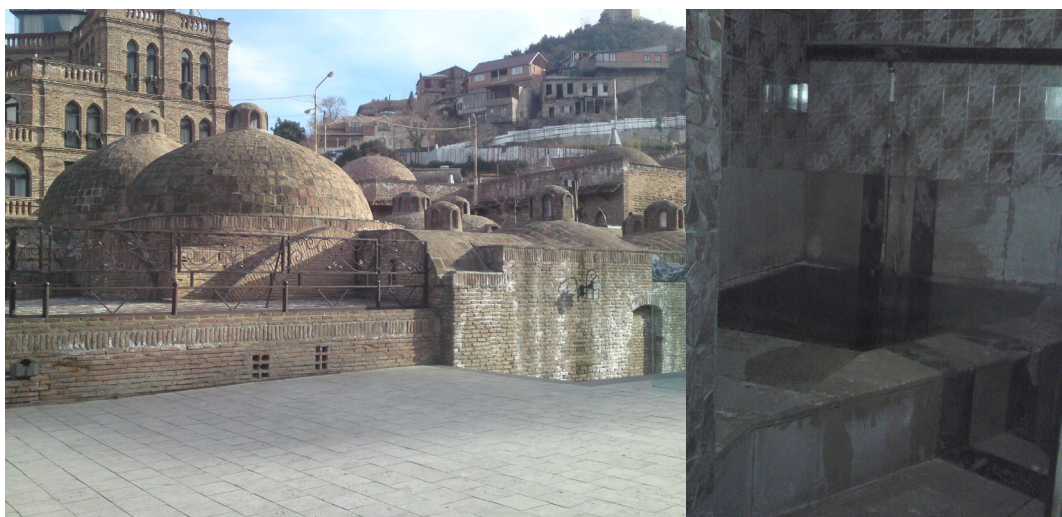


図6 硫黄温泉(筆者撮影)



図7 ワインの町らしい店(ワイン・セラピー)とハチャプリ

お待たせしましたワインである。さすがにワインの町なので、いたるところにワインを売っている店や飲ませてくれるバーなどがある。ただし、これを書いていたらきりがないので、1つだけ筆者の感想を述べさせていただく。トビリシで飲んだワインは、比較的若いワインが多かったのか、エアレーションをしないときついものが多かった印象があった(「安物を飲んだのだろう」というお叱りは甘んじて受ける)。その分、味は濃厚で飲みごたえがあった。さすがワインの町といった店(図7左)を見つけた。看板に

「ワイン・セラピー」と書いてある。ワイン自体をチェックしてくれるのか、ワインで治療をしてくれるのかは不明のままである。ウィーンの「ビア・クリニック」は後者であることは間違いない。

最後に、ジョージアを代表する料理、ハチャプリ（図7右）を紹介する。この卵とバターが乗った船のような形のハチャプリは、アジャリアというジョージア西南部の地域で作られたことから、アジャラあるいはアチャルーリ・ハチャプリと言うそうである。卵をくずして中のチーズとまぜながら、パンの端をちぎってつけながら食べる。「スルグニ」と「イメレティ」というチーズが入っていて、このちょっと塩辛い感じが卵と絡まって美味であった。

4. おわりに

今回はコーカサス地方のジョージアの首都トビリシを紹介した。最初で最後のジョージア訪問であったが、これだけの記事を書くことができるのは、実は、在トビリシ日本大使館の方々に大変お世話になったからである。ISTC/GBには外務省の人が委員として参加しているため、いろんな場面でお世話になったのだが、トビリシの大使館員の方は特に親切で、付きっきりで世話をしていただいた印象がある。筆者は科学諮問委員会（SAC）議長として参加しているので、常時参加者ではあるが、委員ではない。コバンザメのようにくっついて、お世話していただいた次第である。この場をお借りして、お礼を申し上げたい。

次回は、同じコーカサス地方のアルメニアの首都エレバンをご紹介したい。

参考文献

- [1] 深堀智生：「ISTC/SAC 議長が行くーカザフスタン編ー」、核データニュース No.138, 46-50 (2024).
- [2] 深堀智生：「ISTC/SAC 議長が行くーカザフスタン編 (その2)ー」、核データニュース No.139, 28-33 (2024).
- [3] 深堀智生：「ISTC/SAC 議長が行くーウクライナ編ー」、核データニュース No.140, 73-77 (2025).